



少女探偵はハイグレ洗脳に墮つ

体験版

第一話

発端

第二話

潜入開始

第三話

銃と洗脳

登場人物紹介

characters



桐島リナ

探偵『X』として世界を舞台に活躍する少女。その頭脳と身体能力を武器に、数々の難事件を解決に導いてきた孤高の天才。

ハイグレ人間

ハイグレ水着を身に纏い、民間人を誘拐する謎の集団。珍妙な所作に合わせて『ハイグレ』と叫ぶ謎の行動を繰り返す。



?????

第一話 発端

西暦20XX年――。

日本では近頃、東京を中心に関東地方で奇妙な事件が多発し、世間を騒がせていた。娘が学校に行ったきり帰ってこないんです……！」

「仕事から帰ったら妻が居なくなっていたんだ！」

「だから俺の彼女が誘拐されたんだって！ 嘘じゃねえよ！」

事の発端は、その日の搜索願の届出がいつもより少し多い程度の事だった。

しかし、数日経ってもその数は減少するどころか、日に日に増加していく一方であり、発端から一週間が経過する頃には、その数は150件以上にも膨らんでいた。

更に、奇妙なのはそれだけではなかった……。

失踪者とよく似た人物が、街中でハイレグ水着を着用し、奇行を繰り返している様子を撮影した動画が、第三者達の手によってSNSにアップロードされ始めたのだ。

情報が錯綜する中で、失踪者の全てが『女性』であるという噂が拡散された事も事態に拍車をかけ、関東地方の女性達を中心に、恐怖と不安が広がっていた……。

これに対し警視庁は、当初から特別捜査本部を設置して捜査にあたっていたのだが、目ぼしい成果を上げる事は出来ないまま、完全な手詰まりに陥ってしまっていた。

事件の発端から一ヶ月が経過し、関連する失踪者の数は500人を突破。見兼ねた上層部は、捜査本部への助っ人として『ある人物』へのコンタクトを試みる事となった……。

数日後――。

朝から会議室に集められた特別捜査本部の一同は、そのある人物が訪れる瞬間を今か今かと待ち続けていた……。

「まだ来ないのか!? いつまでオレ達を待たせれば気が済むんだよ全く!」

「仕方ありませんよ。最近は海外を拠点にしているという話ですし……」

遅刻に苛立つベテラン捜査員を若手の捜査員が必死に宥めている。

「噂によると、契約前のやり取りはメールでしか受け付けてないらしいですよ」

「何だとお!? 警察を馬鹿にしやがって……! 時間通りに動けねえ奴なんて、い

つまでも待ってられるかよ! 煙草吸ってくる煙草お!」

ベテラン捜査員が早々に痺れを切らし、ヤニを求めて退室しようとドアを開けると

、そこに一人の少女が立っていた。

「何だあ!? ここはガキの来る場所じゃねえんだ! とつとと出てけえ!」

怒りに身を任せ、少女を押し退けようとした瞬間、彼女はその突き出された右手の手首を左手で素早く掴み、軽いハンマーロックを決めて彼を会議室へと押し戻した。

それを見ていた周囲の捜査員達が、野次馬感覚でドア付近に集まってくる。

「痛たたたっ！ テメエ何しやがる……！ 骨が折れたらどうしてくれんだあ！？」
「正当防衛です。それに……、人間の骨はそんなに簡単には折れません」

大袈裟に痛がる彼を軽くあしらうと、少女は颯爽と会議室に入って来た。

「遅れてしまい申し訳ありません。今回捜査協力をする事になった、探偵『X』こと『桐島リナ』です。よろしくお願いします」

『X』――。

数年前、この界限に彗星の如く現れた凄腕の探偵。

捜査への助言や指示に留まらず、時には自ら現場に赴き、単独の潜入捜査までこなしてしまふ自由なスタイルで、数々の難事件を解決に導いてきた孤高の天才。

しかしそんなX本人を前にして、捜査員達の反応は、すこぶる悪いものだった。

セミロングの黒髪にスレンダーな体型、服装はジャケットスタイルにスキニーデニムとハイカットスニーカーという、一見何処にでも居そうな少女……。

おおよそ彼等の想像していたXの人物像とは大きくかけ離れていた事が、彼等の不満の原因である事は明らかだった。

「女……の子……！？」

「Xがこんな小便臭えガキな訳ねえだろ！ 偽物だ偽物お！」

驚愕する者や悪態を吐く者……、捜査員達から様々な言葉が飛び交うが、少女はそ



んな事などお構い無しに話し始める。

「残念ですが、偽物ではありません。私がX本人です。ちなみに年齢は十八歳なので、もう子供ではありませんし、勿論小便臭くありません」

少し呆れ気味に自己紹介を済ませると、彼女はドア付近の壁にもたれ掛けた。

「と、とにかく！ X……桐島さんも到着した事ですし、まずは会議を始めましょう！ 桐島さんも、一旦席に着いて下さい……！」

「私はこのままで結構です。依頼の詳細確認と私個人の捜査方針が決まり次第、直ぐに別行動を取らせていただく予定なので」

「そ、そうですか……あはは……」

その後、リナを除く全員が席に着くと、会議室に険悪なムードが張り詰めたまま、対策会議が始まった。

まず最初に、リナへの依頼の確認も兼ね、事件の発生から本日に至るまでの出来事を時系列順にホワイトボードに書き出し、捜査員達が今迄に集めた数少ない情報が、机の上に並べられた。

リナはそれらに一通り目を通すと、数分間思索した後、ゆっくりと口を開いた。

「これでは……犯行組織の特定と、同組織への潜入捜査——しかありませんね」

「ま、まさかそれ……、桐島さん一人でやるつもりなんですか……？」

「いきなりスタンドプレーとは、随分と自信があるんだなあX様は……」

懲りずに皮肉を言い放つベテラン捜査員にも、全く臆さずリナは話を続ける。

「お言葉ですが、こんなネットで漁れば出てくる様な情報しかない現状では、ノーヒントで始めるのと同じです。今から地道に捜査するのは時間が掛かり過ぎます」

一回りや二回りも歳下の少女から、躊躇い無く正論をぶつけられてしまい、捜査員達はぐうの音も出ない。

「では捜査本部として、他に何か私達に手伝える事はありませんか!？」

それでも協力を申し出てくる若手捜査員の熱意が、リナの彼等に抱く負の感情を和らげ、渋々その口を開かせた……。

「それでは……私が潜入捜査にあたる間、都内全域に可能な限り警察官を巡回警備させて下さい。行方不明者が力尽くで誘拐されている場合、現行犯の状態で見つける事が、助ける最後のチャンスになると私は考えます」

「最後……? それは一体どういう意味かね?」

捜査員達の上司にあたる捜査官の男が、彼女の要望とその理由に興味を示した。

「気になるのはネットで拡散されているあの映像です。行方不明者の一部が、後日街中で目撃されているという事から察するに、連れ去られた先で何かしら洗脳の類を施されている可能性があります。でなければ、街中であんな……みっともない格好をして、訳の分からない奇行を繰り返す事に、論理的な説明がつきません」

「なるほど。所謂『カルト教団』の様な組織が、この事件に深く関与している？」

「勿論単に脅迫されている線もあるので、今ここで断言する事は出来ません」

徐々に皆がリナの見解に耳を傾け始め、会議はそのまま三十分程続いた――。

「以上です。時間が惜しいので、私はそろそろ準備に入らせていただきます」

「では、会議はここまでにしよう。君達は桐島君の支援に全力を尽くしてくれ」

「「「「はいっ！」「」」」」

力強い返事と共に会議が終了すると、捜査員達は続々と街へ駆け出して行った。

若手捜査員が資料の片付けを終え、会議室から出てくると、通路の端で一人佇むリナの姿があった。

「桐島さん……？　どうかしましたか？」

彼が声を掛けると、少女は目線を逸らしたまま一枚のメモを手渡してきた。

「あ、あの……これに書いてある物を……至急用意していただけますか……？」

少しモジモジしながら小声でそう伝えてくる彼女からは、会議での聡明でクールな印象とは違い、どこか年相応の乙女らしさが感じ取れる。

そんなリナから受け取ったメモの内容を早速確認してみると――。

「ハ、ハイレグ水着いい！？　こ、こんなエッチな衣装、一体何に使うんですか！？」

彼の素っ頓狂な声が通路に響き渡り、周囲の捜査員達が一斉に振り返った。

「ご、誤解を招く様な言い方しないで下さい！ 潜入捜査で必要になる可能性があるから、念の為に用意しておくだけです……！ 変な意味は全くありませんから！ 後で取りに行くので、駅のコインロッカーに入れておいて下さい……！」

デリカシーの無い発言に余計な羞恥を味合わされ、彼女は思わず顔を真っ赤にしてしまう。

「りよ、了解です！ ん……？ でも、それならどうしてさっきの会議中に言わなかったんですか？」

「それは……その……」

「そもそも水着くらい桐島さんが自分で買に行けば良いと思うんですけ……」

「恥ずかしいからですっ！ 一々全部言わせないで下さいっ……！」

壊滅的な察しの悪さを一喝したりナは、逃げる様にその場から走り去って行くのだ
った……。

第二話 潜入開始

深夜の東京——。

本来の姿であれば街中から人影が消える事はなく、一部は『眠らない街』とすら呼ばれる程の大都会なのだが、件の影響もあり、最近は閑散とした状態が続いている。

「キヤアアアーツ！ 誰かあー！」

人通りの少ない路地裏に、突如響き渡る甲高い悲鳴。

恐怖で腰が抜け、動けなくなってしまった女性に、ゆつくりと迫り来る影……。

「ハイグレッツハイグレッツ！ 私は『ハイグレ人間』。あなたもハイグレ人間になつて一緒にハイグレしましょう？ ハイグレッツ！ ハイグレッツ！ ハイグレッツ！」

それは青色のハイレグ水着を着用し、自らをハイグレ人間と名乗る女性だった。

ガニ股になり、股間の前から両腕をV字に引き上げる動作を繰り返しつつ、『ハイグレ』という謎の言葉を何度も叫びながら女性へと詰め寄っていく。

「絶対に嫌よ！ そんな変態みたいな真似！」

「それは残念。では、これを使うしかありませんね。ハイグレッツ！ ハイグレッツ！」

嫌がる女性に対し、ハイグレ人間は懐から玩具の光線銃の様な物を取り出すと、彼女に銃口を向け、引き金に指を掛けた。

「誰かあー！ 誰か助けてえー！」

「ハイグレッツハイグレッツ！ 安心して。これであなたも直ぐにハイぐへえッ……！！？」
会話の最中、突如ハイグレ人間の言葉が途絶え沈黙する。

恐怖で目を瞑っていた女性がゆっくりと瞼を開けると、そこにはハイグレ人間に背後からチョークスリーパーを決め、一瞬でダウンさせたリナの姿があった。

「大丈夫ですか？ 怪我は？」

彼女は無力化したハイグレ人間を路上に寝かせ、女性に手を差し伸べる。

「ありがとうございます！ おかげで助かりました……！！！」

巡回していた捜査員に女性の保護を任せると、リナは先程の路地裏へと戻った。
路上にまだハイグレ人間が倒れている事を確認すると、物陰に隠れて様子を伺う。

数分後、目を覚ましたハイグレ人間は何かを呟きながら例の奇行を数回繰り返した直後、どこかへ向かって移動を始めた。

リナはハイグレ人間の跡を付けつつ、貸与されている無線を取り出した。

「こちら桐島です。犯行組織の一味と思しき不審者の追跡を開始します。何か動きがあり次第、またこちらから連絡します」

（ハイグレ人間……？ ふざけた名前……。この一味に拠点の様な場所が存在するなら、いつかは必ずそこへ戻る筈。先ずはそれを突き止めないと……！！）

潜入捜査の足掛かりを掴む為、リナはハイグレ人間の追跡を開始した。

追跡を開始してから数時間が経過し、日の出の時刻が迫る頃――。

リナはハイグレ人間を追って、いつの間にか東京湾周辺まで来てしまっていた。
(ひたすら徒歩でウロウロと……、どこまで行くつもりなの……?)

休む事なく夜通し歩き続けたハイグレ人間は、港に辿り着くと躊躇いなく立ち入り禁止エリアに侵入し、誰も居ない岸壁でようやくその歩みを止めた。

そして、辺りに誰も居ないのを確認した直後……。

「ハイグレッツハイグレッツ！ ただいま帰還しました！ ハイグレッツハイグレッツ！」

例の動作を繰り返しながら、海に向かって帰還の報告を始めるハイグレ人間。

(さつきから何をしているの？ まさか、私の尾行を撒く為にならねと……!)

理解し難い行動の連続で、一瞬リナの脳裏に失敗の二文字がよぎる……。

しかし、その直後に目の前で起こる出来事は、彼女の予想を更に超えるものだった。

ハイグレ人間の真正面、海上の空間に、突如光る縦筋が入り、まるで自動ドアが開く様に両側へスライドし、徐々に広がり始めたのだ。

目を疑う様な光景に、リナはその場で唾然としたまま動けなくなってしまう。

数秒後、岸壁から十数センチ先の海上には、文字通り『出入り口』が出現し、ハイグレ人間はその中へと消えていった。

そして開いた時と同様、出入り口は数秒で自動的に閉じられ、元の景色に戻った。
この間、僅か十数秒の出来事である……。

リナはすぐさま岸壁まで駆け寄り、先程出入り口が現れた辺りを調べ始める。

そして海上の空間に向かって右手を伸ばしてみると、ペタッ——と掌に硬い壁の様な感触があり、目に見えない『何か』がそこに存在すると分かった。

（こんな高精度な光学迷彩見た事無い……って、それどころじゃなかった……!）

「こちら桐島です！ 不審者の追跡中に東京湾の港で……あれ……？ 本部、聞えますか！？ 応答して下さい！ こちら桐島！ 本部！ 本部！？」

彼女が何度呼び掛けても、無線機から応答が返って来る事はなかった。

（おかしい……。さっきまではちゃんと使えてた筈なのに……）

直後に私物のスマートフォンでも連絡を試みたが、結果は全く同じ。

（局地的かつ強力な通信妨害……。妨害電波の発信源は、おそらくこの透明な出入り口の向こう側……。とにかく急がないと……!）

リナは真後ろにある倉庫の影に駆け込むと、颯爽とジャケットを脱ぎ捨て、デニムのベルトを緩めてフロントボタンを外し、ジッパーを下ろした。

（妨害電波の圏外に出て本部に連絡出来たとしても、この場所に気付いた事を相手に悟られて、別の場所に移動されてしまったら意味が無い……!）

靴を脱ぎ、下ろしたデニムから両脚を抜いて、残ったトップスも手早く脱ぎ捨てる。

本来なら下着姿になっている筈なのだが、そこには『ハイレグ水着』を着用したりナの姿があった。



僅かに幼さを残しつつも均整の取れた身体に、雪の様な純白のハイレグ水着。伸縮性のあるサラサラとしたポリエステル生地が、絶妙な肌触りと締め付けを生み出し、彼女の柔肌をびっちり包み込む。

大きさと形、バランスのとれた美しい胸の膨らみをしっかりと強調しつつ、股間から切れ上がる鋭いVラインはウエストの辺りにまで達し、腹直筋、臍、下腹部、そして恥丘へと……、女性特有の美しい凹凸を生地越しに薄らと浮かび上がらせた。

各部の生地を軽く引つ張りながら全体的な微調整をし、最後に臀部に食い込んだ生地を両手の人差し指でクイツと直す。

引つ張られた生地が元に戻る際、『パチンッ』と小さく音を立て、その際に生じる僅かな振動が、臀部のVラインからハミ出る瑞々しい桃尻を小さく揺らした。

（依頼を受けた時から覚悟はしていたけど、捜査の為とはいえ……、こんな……裸みたいなみっともない格好を……私がする羽目になるなんて……）

羞恥に頬を赤らめつつソックスを脱ぐと、ハイグレ人間への変装が完了した。

（見た目はこれで大丈夫。後は記録用の超小型カメラを……予め臍の部分に空けておいた穴に合わせて、テープで固定すれば……。うん、これなら問題無さそう）

準備を終えたりナは、脱いだ衣服を近場に隠し、足早に岸壁へと戻ってくる。

そして先程と同じ位置に立つと、目を瞑って大きく深呼吸を始めた……。

（さっき見た『アレ』を出来るだけ忠実に再現する。一瞬だけいい、心を無に……！）

そう決心して目を開いた次の瞬間、リナは両足を肩幅より一回り大きく開いて腰を少し落とした『ガニ股』状態になり、同時に股間の前でV字に構えた両腕を力強く引き上げながら、深呼吸で取り込んだ酸素を全て使い切る勢いで口を開いた。

「ハイグレハイグレー！ ただいま帰還しました！ ハイグレハイグレー！」

静まり返った早朝の海に少女の間拔けな叫びが響き、波音の中に溶けていく――。目の前のドアが再び開く事を信じ、屈辱的なハイグレの姿勢を維持し続けるリナ。恥ずかしくない……、これは必要な事……！ 恥ずかしくなんかない……！

すると、眼前の空間に一筋の光るスリットが入り、青白い光を漏らしながら徐々に左右へ広がり始める……。

（やった……！）

瞬時にハイグレの姿勢を止め、小さくガツポーズをする彼女の前に、先程ハイグレ人間が消えていった出入口が再度出現した。

その中にはSF作品に出てくる宇宙船の様な、未来的構造の通路が続いている。

リナは細心の注意を払いつつ、岸壁から素早く内部へ飛び移って謎の空間への侵入に成功すると、堂々とした態度で通路の奥へと突き進んでいく。

（出入りにわざわざあんな面倒な認証を必要とするって事は、ここでは頻繁にアレを求められる可能性が高い……。肝心な所でボロを出さない為にも、常にハイグレ人間を装った状態を維持しないと……）

通路を少し進むと、前方から複数人のハイグレ人間達が列を成して歩いてくる。

先頭を歩くハイグレ人間は、既にこちらの存在に気付いており、お互いの距離が2メートル程に接近した所で、向こうから先に話しかけてきた。

「ハイグレッツハイグレッツ！ お疲れ様です！」

「「「ハイグレッツハイグレッツ！」「」」」

後ろに並んでゐる者達と共に、頭のおかしな挨拶をしてくる。

（全然怪しまれてない……。ハイレグ水着を着てれば、仲間じゃなくても見分けが付かないんだ。それじゃあ、適当に口裏を合わせていれば大丈夫そうね……。）

「ハイグレハイグレ！ お疲れ様です！」

リナが全力のハイグレを返すと、ハイグレ人間達は出入口の方へと歩いていった。

珍妙なやり取りを終え、更に奥へ進んで行くと、大きく開けた空間に辿り着いた。

ドーム状に広がるその空間の中心には、円形のカウンターがあり、複数台設置されているPCの様な端末を数人のハイグレ人間達が操作している。

そこかしこにハイグレ人間達が散見される事から、ここはこの謎の場所に於けるエントランスの様な位置付けなのだろう。

更に周りをよく見てみると、壁面には六つの通路があり、リナが通ってきたのはその内の一つだったようだ。

（この複雑な構造だと、船や潜水艦の可能性は極めて薄い……。仮に海上施設だったと

しても、今の時代にこれだけ大きな建造物をこの目立つ集団が、誰にも気付かれずに完成させるなんて、不可能に近い筈……)

すると、立ち止まって思案していたリナの死角から、何者かが接近してくる。

「ハイグレッツハイグレッツ！ その白いハイグレのあなたッ！ どうかされましたかッ!?」

大きな声に驚き振り返ると、そこには一人のハイグレ人間が立って居た。

(ああーもう、次から次へと……。まあでも、せつかく声を掛けて来た事だし、ここはこの人を最大限に利用させて貰おうかな)

「ハイグレハイグラー！ 実は私、今日初めてここに来たばかりで……」

「ハイグレッツハイグレッツ！ 新入りさんですねッ！ 自分でよければ、案内させていただきますますよッ！ ハイグレッツ！ ハイグレッツ！ ハイグレッツ！ ハイグレッツ！」

「本当ですか？ 助かります。ハイグレハイグレハイグラー！」

「ハイグレッツハイグレッツ！ それでは、自分について来て下さいッ！」

案内役を買って出てくれたハイグレ人間に先導され、リナは向かって左側の通路へと歩き出す。

(ここからが本番。この組織の全容、必ず私が明らかにしてみせる……！)

リナの本格的な潜入捜査が始まった――。

第三話 銃と洗脳

潜入捜査を開始してから三十分が経過――。

リナはハイグレ人間からの好意で、謎の空間内部の案内を受けていた。

「この様に、先程自分達が居た『ステーション』から放射状に伸びる六本の通路のうち、四本はこの様な『居住区画』に繋がっておりまして、私達の生活するスペースになっているのですッ！ ハイグレッ！ ハイグレッ！ ハイグレッ！ ハイグレッ！ ハイグレッ！」

意気揚々と説明する彼女とは対照的に、リナはその場を見て眉を擡めていた……。彼女の反応は、正常な人権感覚を持つていれば至極当然のものだ。

居住区画と称されたその場所は、四畳半程の何も無い空間に、九人一組のハイグレ人間達を無理矢理に詰め込んだ部屋が連なるだけの、極めて劣悪な環境だったのだ。

「これ……、皆さん窮屈じゃないんですか……？」

あまりの酷さにリナは思わずハイグレも忘れ、余計な質問をしてしまう。

「ハイグレッ ハイグレッ！ ハイグレするだけですからねッ！ 広さは全く問題ありませんよッ！ ハイグレッ！ ハイグレッ！ ハイグレッ！ ハイグレッ！」

要領の得ない回答に若干の苛立ちと不快感を覚えつつ、他の部屋もいくつか見ると、更にもう一つおかしな点に気が付いた。

どの部屋を覗いてみても、誰一人として床に座ったり、寝転がったり等の『休憩』を取っておらず、まるで何かに取り憑かれたかの様に、一心不乱と例の『ハイグレ』だけを延々繰り返しているのだ。

その後、残り三つの居住区画も確認したが、いずれも全く同じ状態というおぞましい結果だった事で、リナの中で保留にしていた『カルト教団による誘拐と洗脳』の可能性が、着実に現実味を帯びてくるのだった。

居住区画を見学し終えた二人は、中央のステーションまで戻ってきていた。

「ハイグレッ ハイグレッ！ 最後は『大広間』ですッ！ では、張り切って行きましょッ！ ハイグレッ！ ハイグレッ！ ハイグレッ！ ハイグレッ！ ハイグレッ！」

「ハイグレ ハイグレー！ よろしくお願ひします！」

二人が奥の通路へと移動しようとしたその時——、真反対の出入り口方面から、何やら騒がしい声が聞こえてきた……。

リナは一旦足を止め、喧騒の方角を注視する。

すると、通路の奥から女性を拘束した三人組のハイグレ人間達が現れ、ステーションのカウンター前までやって来た。

「放せ……！ 放せよこの変態犯罪者共……！」

二人掛かりで羽交い締めになれながらも、悪態を吐き激しく抵抗している女性。

七三分けに整えられたボブカットに、アンダーリムの眼鏡、服装はパンツスーツにハイヒールと、一見大人びたフォーマルな印象を受けるが、その粗暴な言葉遣いからは、ハイグレ人間達に対する激しい怒りが伝わってくる。

「ハイグレッ ハイグレッ！ 我々に尾行を働く不届きな未洗脳者を一名連行してきました！ 我々はまだ『ハイグレ銃』を支給されておりませんので、代わりに洗脳をお願いしてもよろしいでしょうか？ ハイグレッ！ ハイグレッ！ ハイグレッ！」

三人組の代表者らしき者がそう伝えると、カウンターから銃器の様な物を携えたハイグレ人間が現れた。

「ハイグレッ ハイグレッ！ お手柄ですね。 ハイグレッ！ ハイグレッ！」

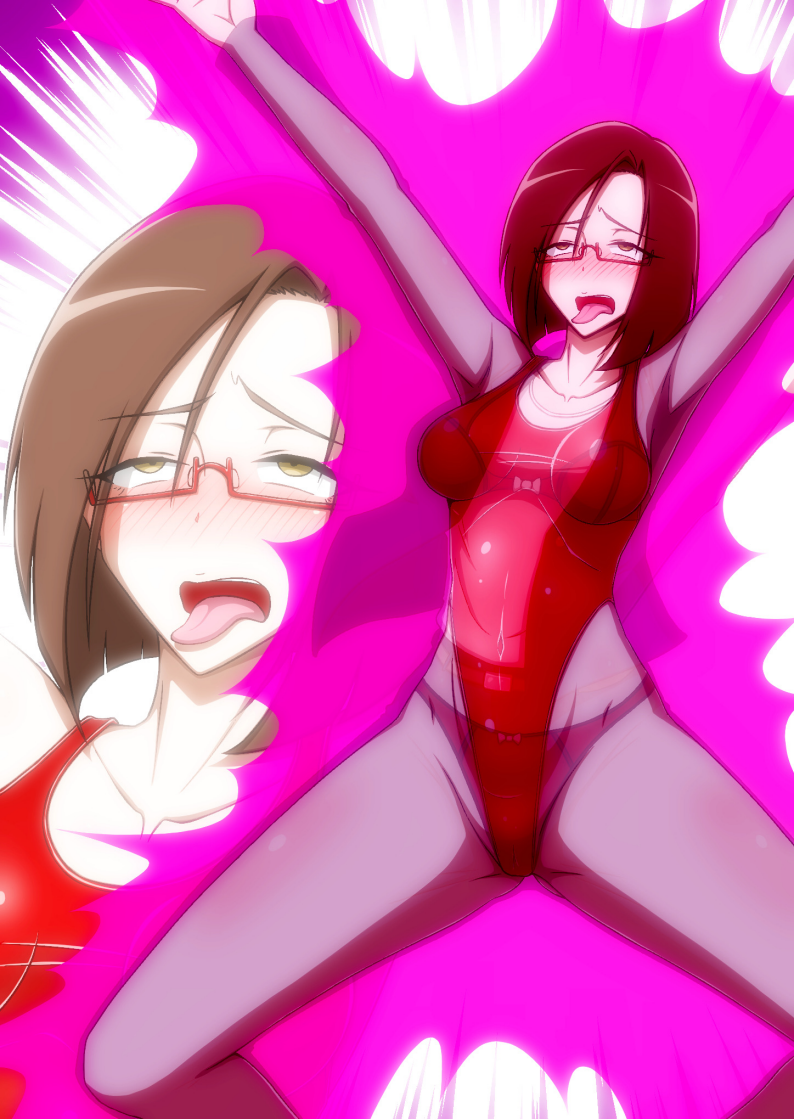
「アタシの妹はどこだ！ アンタ達が誘拐したのは分かっているんだ！ 妹を返せ！」
彼女は怒りに任せてハイグレ人間達の拘束を力尽くで振り解いた。

「ハイグレッ ハイグレッ！ 安心して下さい、妹さんには直ぐ会えますよ。このハイグレ銃で洗脳した後になりますかね。ハイグレッ！ ハイグレッ！」

ハイグレ人間はそう告げると、ハイグレ銃を構えて彼女に狙いを定める。

（あの玩具みたいな銃……、確かさつき私が尾行したハイグレ人間も、同じ物を持っていたような……）

リナがそう思い返している最中、眼鏡の女性は目の前のハイグレ人間目掛けて走り出していた。



絶頂の様な状態からようやく素面に戻った眼鏡の女性は、目の前の自分を撃ったハイグレ人間に向かって、再度詰め寄ろうとするのだが……。

「ハイグレレッ……!! ハイグレレッ……!! な、何だよこれ……ハイ……グレレッ……!!」
身体が勝手に……ハイ……グレレッ!! ハイ……グレレッ!! ハイグレレッ……!!」

彼女の足が前へと踏み出す事は無く、代わりにその場でしつかりとガニ股の状態に開かれ、奴等と同じ『ハイグレ』を繰り返してしまふのだった。

彼女自身の反応と、そのぎこちない動きから、それが己の意思ではない事は明かだ。「ハイグレレッハイグレレッ!! この者は私が見ておくので、皆さんは持ち場に戻って下さい。ハイグレレッ!! ハイグレレッ!! ハイグレレッ!!」

周囲で見物していたハイグレ人間達が、次第に各々の持ち場へと帰って行く。

「ハイ……グレレッ!! お前……ハイグレレッ……!! アタシの身体に……何を……ハイグレレッ……!! いやがった……!!? ハイグレレッ!! ハイグレレッ……!!」

「ハイグレレッハイグレレッ!! 説明したところで、もう手遅れです。そんな事より、もつとハイグレレしましょう。ハイグレレッ!! ハイグレレッ!! ハイグレレッ!!」

ハイグレ人間は彼女の問い掛けに応える事なく、ひたすらハイグレを繰り返す。

「ハイグレレッ!! ハイグレレッ!! ふざけんな……ハイグレレッ!! 元に……戻せえ……ハイグレレッ!! ハイグレレッ!! ああつ……ハイグレレッ!! ハイグレレッ!! クソツ……ハイグレレッ!! ハイグレレッ!! ハイグレレッ!! ハイグレレッ!!」



悔しがる彼女の声から荒々しさが消えていき、徐々に艶かしい声色へと変化していくと共に、ハイグレの動きもメリハリの効いた円滑な物になっていくのだった……。潜入捜査を破綻させない為、リナは彼女を遠巻きに見ている事しか出来ない。

「ハイグレッツハイグレッツ！ では私達も、そろそろ案内の続きに戻りましょうかッ！ ハイグレッツ！ ハイグレッツ！ ハイグレッツ！ ハイグレッツ！」

（目の前で襲われてる人を見捨てるなんて……。でも、ここで下手に騒ぎを起こして、私の正体がバレたら元も子も無い……。だから今は……。ごめんなさい……。！）

「ハ、ハイグレ！ そうですね、行きましょうか……。ハイグレハイグレ！」
後ろ髪引かれる思いを押し殺し、リナ達は大広間へ繋がる通路に向かった――。

歩き始めて数分後――、二人は一際大きな空間に到着した。

「ハイグレッツハイグレッツ！ ここが大広間ですッ！ ハイグレッツ！ ハイグレッツ！」

「ハイグレハイグレ！ こ、こんなに広いんですね……。！」

思わずそう零したりナの視界には、中規模コンサートホール程の広大な空間が広がっていた。

収容キャパシティは、おおよそ5〜600人。

奥には小規模なステージもあり、その左脇には更に奥へと続く扉も確認出来る。

「ここは……。一体何に使う場所なんですか？」

「ハイグレッツハイグレッツ！ この場所は基本的に『ハイグレーナ様』の御言葉をいただいたり、大規模な作戦のブリーフィングを行う際にしか使用しませんッ！ ハイグレッツ！ ハイグレッツ！ ハイグレッツ！ ハイグレッツ！」

『ハイグレーナ様』――。

その人物がこの組織の長である事は、わざわざ確認しなくても瞬時に理解できる。

リナはそのハイグレーナ様とやらの情報を得る為、いくつか探りを入れてみる事にした。

「その……ハイグレーナ様は、普段どこにいらつしやるんですか？」

「ハイグレッツハイグレッツ！ あちらのステージ左脇にある扉の先に、ハイグレーナ様の御部屋があると聞いていますが、何分自分もハイグレ人間になってから日が浅いので、まだ実際にその御姿を拝見した事はないのですッ！ 御期待に添えなくてすみませんッ！ ハイグレッツ！ ハイグレッツ！ ハイグレッツ！ ハイグレッツ！」

「ハイグレハイグレ！ そうだったんですね。こちらこそすみません……！」

（予想はしていたけど、そう簡単に会える存在ではないという事ね……。どこから監視されてるか分からないこの状況じゃ、あまり派手に動くのは論外だし……。だとすると、本人がここに現れるタイミングを待つしかないか……）

「親切な案内、ありがとうございます。ハイグレハイグレ！」

「ハイグレッツハイグレッツ！ お役に立ててよかったですッ！ それではそろそろ戻り

ましようッ！ ハイグレッツ！ ハイグレッツ！ ハイグレッツ！ ハイグレッツ！」

一旦大広間を後にし、再度ステーションへと戻る最中、リナは歩きながら自分が次に何をすべきかを考えていた……。

拠点内部の更なる調査、あの光線銃の入手及び構造解析、洗脳された人達の救出方法の模索等々……、脳内に浮かぶ選択肢は多岐にわたるのだが、リナが一番気に掛かっていたのは、先程止むを得ず見捨ててしまった眼鏡の女性の事だった。

（やっぱり……いくら潜入捜査とはいえ、民間人を見捨てたままになんて、私には出来ない……！ 戻ったら先ずあの人を助けないと……！）

己の中の正義感に突き動かされ、リナは彼女の救出方法を第一に考え始める。

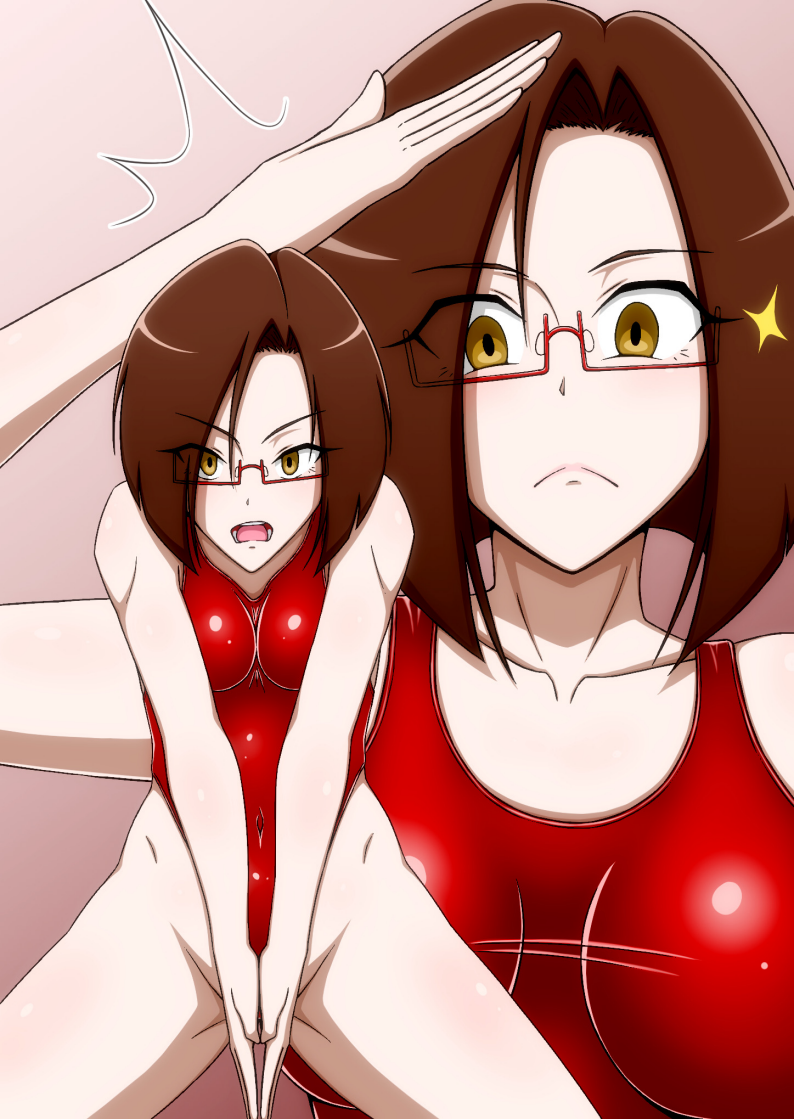
（光線銃で撃たれた直後、彼女はあの変な動きを明らかに嫌がっていた。おそらくあの姿に変えられたとしても、直ぐに完全に洗脳されてしまう訳じゃない……。だとすると、今からでも助けられる可能性だって十分にある筈……！）

ステーションに戻ってきたリナは、真っ先に眼鏡の女性の様子を確認しようと、カウンターの付近までやって来たのだが……。

「えっ——」

リナは、自分の目に映った光景に絶句した。

「ハイグレッツハイグレッツ！ ハイグレッツ！ ハイグレッツ！ 長瀬カエデ、只今洗脳完了しましたあ！ ハイグレッツ！ ハイグレッツ！ ハイグレッツ！ ハイグレッツ！ ハイグレッツ！」



自らを『長瀬カエデ』と名乗った眼鏡の女性は、既に完全なハイグレ人間へと洗脳されてしまっていた……。

(そんな……!! ついさつきまで抵抗していたのに……!! 何で……!!?)

リナが驚くのも無理はない。

彼女がああ姿にされてから、時間にしてまだ十分程しか経過していないのだ。

「ハイグレッ ハイグレッ! これで貴方もハイグレ人間です。取り敢えず、ハイグレーナ様に楯突いた罰として、暫くそこで謝罪のハイグレでもして下さい」

そう命令されたカエデは、ステーションのど真ん中で即座にハイグレを始めた。

「ハイグレッ ハイグレッ! ハイグレーナ様……!! この度は、本当に申し訳ありませんでしたあ! ハイグレッ! ハイグレッ! ハイグレッ! ハイグレッ!」

ハイレグ水着姿に変えられ露わになったカエデのグラマラスな身体が、豊満な胸と尻を中心に、ハイグレの振動でブルンッブルンッと躍動する。

(くっ……、助けてあげられなくて……ごめんなさい)

リナは周囲のハイグレ人間達に怪しまれない様に、少し離れた位置から彼女を見つめつつ、心の中で謝罪する事しか出来なかった。

カエデの謝罪ハイグレは、その間も一切途切れる事無く延々と繰り返される……。

「ハイグレッ! ハイグレッ! ハイグレッ! ハイグレッ! ハイグレッ! ハイグレッ! ハイグレッ! ハイグレッ! ハイグレッ! ハイグレッ!」

所作と声色、そしてその真剣な表情は、まるで一回一回のハイグレが『申し訳ありませんでした』と叫んでいる風に、見ている者を錯覚させる程だ。

既に今のカエデから先程までの『憤慨』のイメージは一切見受けられず、寧ろ自らの罪を償える事に幸福を感じ、心から歓喜している様にすら見えてくる。

「ハイグレレッツ！ ハイグレレッツ！ ハイグレレッツ！ ハイグレレッツ！ ハイグレレッツ！ ハイグレレッツ！ ハイグレレッツ！ ハイグレレッツ！ ハイグレレッツ！ ハイグレレッツ！」

（ハイグレ人間……。コイツら一体何者なの……。？ あの銃で撃たただけで、あそこまで豹変してしまうなんて……。私も……。例外じゃない……。？ もし捕まって洗脳されてしまったら、私もあんな風になってしまうの……。？）

彼女の変わり様を見て、リナは自分の心に僅かな恐怖心が芽生えるのを感じた。

（弱気になっちゃいけない！ とにかく今は、潜入捜査の完遂を第一に……。）

気を取り直し、捜査を再開しようとしたその時、拠点内にチャイムが鳴り響いた。

「ハイグレ人間の皆さあゝん、おはようございまあゝす♪」

何処からともなく聞こえてくるその声からは、物腰の柔らかさと豊かな包容力、そして底知れぬ妖艶さと邪悪さが伝わってくる……。

声の主がこの組織の長『ハイグレーナ』のものである事をリナは瞬時に察知した。

「ワタクシからおおゝつても大事なお話があるのでえ、今すぐ全員大広間に集合して下さいあゝい♪ わかりましたかあゝ？」

「ハイグレッツハイグレッツ！」

その場にいたハイグレ人間……、厳密にはこの謎の空間に存在する全てのハイグレ人間達が、一齐にハイグレをシンクロさせた事で、地鳴りの様な奇声が響き渡る。

そして大量のハイグレ人間達がステーションを経由し、大広間に繋がる通路へ次々と流れ込んでいく。

(ハイグレーナ……！！)

最も欲しかった情報を手に入れる機会が、予想より早く巡って来た事で、リナの全身が程良い緊張感に包まれ、武者震いし始める。

(大丈夫……。必ず……。必ずやり遂げてみせる……！)

彼女はそう強く決意しながら気持ちを落ち着け、ハイグレ人間の群衆に紛れ込み、再度大広間へと向かうのだった――。

この続きは製品版で！